

## 渡世賞の決定まで

文芸作品を募集してみようではないか、という提案が編集委員会のワタリから出てみんな賛成したのは夏だった。

応募者へ送る記念品の手拭いは編集委員T2のデザインで間もなくできた。

しかし、実際にどのくらい作品が集まるものかは、誰にも見当がつかなかった。心配だった。

結果はごらんのように、東京から北九州までの広い範囲の応募があり、詩以外の部門でそれぞれの当選作を得ることができた。

終つてからの希望としては、もっと釜ヶ崎のなかからの応募がたゞさんあったらなあという気持がある。が、私たちは仕事につれて全国どこにも行くのだし、また全国どこにでも、数の多い少ないはあるが同じような仕事に生きている仲間は多いので、応募作の住所が釜ヶ崎

それとの関連で、屏のページにのせた東京の「岩 太郎」氏の作品、「天の川おれ公園の水を呑む」も切実。腹へ流れ落ちるまでに、食道も凍ってしまいそうな冷たい水の味は私も知っている。それでもまだ当時は仕事が多かったから、あくる朝壺山組あたりへ行けば、空きっ腹でもやれる程度にらかな仕事にありつけた。無論、ほんとにケタ落ちに安かったけれど。金徳組とか佳山組とかもそんなものだった。

次に編集委員ヤジ馬の個別感想を紹介。

比呂志断腸集よりとして①から⑩番まで送って頂きましたが、そのうち①③④⑤⑦をまとめて一つのものと見て当選作にさせて頂きました。除いたものは「疲れ果て／今は湧きて／飢えばかり／凝然として／ピケラインに／起つ」という傾向のものです。

作者は多分かなり高齢のお方のように思われますが、後でおこられることを覚悟して言えば、これを私が強く推した理由は、身内（姉）に対する若干エロを含んだ憧憬と第一連にあらわれている若々しいリキミ、それに対するかのような最終連のキドリ、ミエのきり方などが、全体としての面白味を一勿論、ワッハッハと笑う面白さではないーかもし出しているからです。

でないことを、あんまり悲しむ必要もないわけだ。

釜ヶ崎のなかからの当選作で、ちょっと説明しておきたいのは、短歌の「太郎」氏の作品。

太郎氏は阪堺線の東側にある高層ドヤ、ビジネスホテルに泊っている。それを考えに入れて「日雇いの我をたずねる人はなし電音のみ来ては遠のく」の歌を味わってもらおうというと思う。

個室といえれば体裁はいいが、箱のような独居監房のような、ドヤに寝ていて聞く電車の音に太郎氏は思いを深めている。

また同じ太郎氏が「川柳」と書いて送ってくれた「ケタ落ちの現金黙々年の暮れ」は俳句として扱い、当選した。年末だから、正月になると仕事がぐんと少なくなるから、ケタ落ちの安い賃金でもがまんして働らくというのは、お互、身におぼえのあること。

私には、この連作にあらわされている過去、あるいは過去の身内に対する憧憬と近親憎悪的な反感、それらから自己をへだて、正当化するために、絶対に捨てること出来ない自分流のミエ、キマリ、芝居やおどりで形がキマルという時のキマリ、ミエーは、釜に居るほとんどの人が持っているものだと思います。

それは個人々人によって、物語れば全く違うように思えるかも知れませんが、ほぼこの連句のあらわしている感情構造と通じるものがあるのではないか。

ともかく、一読して共感・そしてきまりの悪さに反感できる作品です。

もう一つ、俳句の方でも私（ヤジ馬）が特にいいと思つた作品がありました。

寒や同僚（とも）笑うというも現場（ここ）ばかりこの句からは、朝、現場について仕事にかかるまで、あるいは昼の休憩の時などには、現場でたまたま一緒にあった仲間とたき火を囲んで談笑することもあるが、仕事が終わって、一旦釜についてデズラをもらえば、木枯しに吹かれて散り散りになるだけというさびしさが伝わってくる。そのさびしさは、たき火を囲んでの一刻が楽しければ楽しい程深い。またそのさびしさは、寒さに腕組みして背を丸め、トットとドヤに急ぐだけで、その腕を

解いて「一杯いこうや」と声をかけられぬ自分に対してのものであるかも知れない。

「現場（ここ）ばかりではない仲間（とも）の泣き笑い」お互いに、寒さに負けずノビノビとガンパロウ！

### 小説・生活記録について

小説では次の作品が候補になった。

ふりかえりふりかえりの日々 京都 佐藤節夫氏

我が半生の記録 横浜 尾野領一

題 滋賀 杉鷹二

この三篇と掲載した二篇にしばって選考した結果、井上才五郎氏の「かげろうの如く」を生活記録部門の扱いとして当選、丹田一平士氏の「ケッチン」を小説の当選ときめた。

横浜の尾野氏のものには惜しかったが、もっと後半部分に力を入れて書いてあったらと選考委員会は意見一致した。

京都の佐藤氏のも力作で惜しかった。

九パーセントには夢ものがたりなのだから。

しかし、時間給千五百円、一日で一万五百円という造船トビの賃金は、作品に出てくる藤永田より大手の造船会社員に尋ねたら、そんな相場だとの返事だった。もっとも、月のうち多くて二十日、大ていはもっと少ない仕事日数らしい。

「かげろうの如く」の井上氏も、作品のなかで賃金の金額をはっきり書いてくれたらよかったと思う。

毎日新聞が、この労務者渡世賞の決定を記事にしたなかで「労働者の芥川賞」と編集委員がしゃべったように書いていたが（七六・一一・二三朝刊）、あれは記者が作ったウソだ。

編集委員会では、この作品募集にそんなつもりはまったく持っていない。

編集委員会が考えているのは、不景気でシンドイ生活のなかから、そのシンドサをもろに反映した作品が出てくるのと並行して、シンドサに音をあげないで、笑い飛ばしてしまうような朗らかさも出てこないかということだった。

「ケッチン」はそのへんで丁度よかった。

改をいうと、井上氏のはネオン工事、丹田氏のは造船の、どちらもトビ職が主人公なのがちょっと困った。

滋賀の杉氏は一番書きなれた人のようで、一人の日雇いの死を扱った点、当選した井上氏のものと同通だった。そして、杉氏に比べれば稚拙ともいえる井上氏の、それだけにけん命な書き方がみなに推された。

井上氏は入院中で、ペン習字をやっているという。文章のなかで、どうしてもこのままではと思われる部分を、最少限度、編集委員が手を加えた。また原稿用紙二六枚ぶっ通しになっていたのを、適当に区切った。これは読みやすくするためで、小説の当選作「ケッチン」も、章分けはしてなかったのだが、編集委員が五章に分けて、各章に小さなタイトルをつけた。

丹田氏の文章はとても歯切れがよく、いたるところにフチョウ、隠語などが出てきて面白い。ただ、丹田氏はわかると思って説明ぬきにしてあった言葉のいくつかは、やはり説明があった方がいいので編集委員が少し補充した。（○）の中は、もともと丹田氏がつけてくれた説明と、編集委員の補充だ。

丹田氏の作品は明るくて、現実性も十分にある。だが同時に、これはまったくのオハナシとして読んでもいいはずである。

三百五十万円の貯金現在高、目標はあと二年で五百万円にすること、などというのは、釜ヶ崎の私たちの九十

トビは釜のエリートみたいなものだ。

もし、次回にまた作品募集できたら、釜の大多数を占めるほんまのアンコ、人夫出しへ仕事に行く「土工・雑役」の職種から、いい作品が出てもらいたい。

なお、選考委員会は十一月二十一日にひらかれ、当選者には住所確認のため返信はがきを入れた当選通知を出した。その返信を受けとってから賞金を送る予定でいる。また、応募記念品の特製手ぬぐいは余分があるので、希望の人には釜生協で安く売らるから問い合せて下さい。